



強い気持ちが創った 花のまち

心
あ
っ
た
か
ニ
ュ
ー
ス

札幌近郊の「何も無い」ベッドタウンから、花のまちづくりのトップランナーとして、いまや全国に知られる北海道恵庭市。2022年には国内最大級の花と緑の祭典のメイン会場に選ばれ、30日の期間中に市の人口の5倍近い34万人が訪れた。この街づくりをした主婦、内倉真裕美さんのことがニュースにありましたで、ご紹介します。内倉さんが夫と3人の子どもたちと恵み野に引っ越してきたのは1988年。開発間もない新興住宅地で、少し前までは雑草が生い茂る休耕地だった。2人の息子の転校手続きのために小学校へ行った時に聞こえてきたのが、恵み野は何もないまちだから」という保護者同士の会話だった。それを聞いて、内倉さんの心は躍った。何にもないということとは、自分たちで作り上げていけると思っただけです。地域の人々とお祭りのように、このまちをこんな風にしていくというものができたら、きつと面白いだろうなって。子どもたちが誇れる

故郷を作ろうと心に決めたものの、それ以外には信号機すらない土地だった。ある時、恵庭市の職員や花苗生産者らが、ニュージラランド・クライストチャーチを視察した際の写真の美しさに心を奪われた内倉さんは、このとき、花の町にしようという決意をします。クライストチャーチが写真によるガーデニングテストによってきれいな町並みを維持していると聞くと、すぐにまねをした。1991年から恵み野フラワーカーデニングコンテストを開催。公募方式では参加するのがいつも同じ家になるので、3年目からは勝手にまちを回って、写真を撮って、勝手に表彰することにしたんです。内倉さんは大量に撮影した写真を、夏祭り会場などの人が多く集まる場所に展示した。人だかりができるほどの関心を集め、自分でもやってみようという人が現れ始めた。ガーデニングコンテストをきっかけに、自宅の庭を公開する「オープンガーデン」をする人が増えていった。恵み野の活動は評判となり、1995年に「花のまちづくりコンクール」で建設大臣賞、96年には「北海道花と緑のまちづくり賞」を受賞する。98年には女性誌「ミセス」に花のまちとして16ページにも及ぶ特集が組まれ、恵み野の主婦

たちがガーデナーとして紹介された。雑誌の効果は絶大で、恵み野には花をみたい人が全国から訪れるようになった。内倉さんはボランティアの「カリカリ隊」で定期的に除草作業をしたり、オープンガーデンを訪れる人を案内したりすることもある。現在は観光協会が作っている花マップも、当初は内倉さんが手作りをしたものを配っていた。恵み野の花のまちづくりのすごいのは、30年間も続いているところ。恵み野と同じ頃にガーデニングやオープンガーデンで有名になった地域はいくつかあったものの、恵み野のようにずっと走り続けていくところはあまり見ないことではないという事です。やふーニュース 奇跡のまちづくり「ガーデニングの聖地・恵庭を生んだ1人の主婦の挑戦 より」人の強い気持ちは、創ることにはすごい原動力となると思いました。